

特集

社会主義中国におけるロロ族カースト思想の保持

潘 蛟

要 約

本論文は、一九五〇年代半ばの中国共産党による民主革命以前、カーストのような身分がロロ社会の階級とどのように融合したのかを述べるとともに、ロロのカースト思想の根強い持続性とそれに関連する今日の慣行を分析している。筆者は、その根強い持続性は単にロロの伝統が頑強だということだけによるものではないと考える。皮肉にも中国当局は、階級をなくし平等を実現することを目的論的公約にしているが、階級政治によってカースト制の実践を維持した。

多くの人にとって社会主義とは科学的な主張よりも、道徳的意味の方が強いであろう。社会的不平等の撲滅は共産主義革命の必然的結果であるだけでなく、高邁で神聖な使命である。一九七〇年代前半の文献を読み直すと、毛沢東主席のカリスマ性は、「新しい階級」すなわち共産主義官僚を撲滅する努力によって生じていたことがわかる。共産主義の高邁で神聖な努力により、人民は残酷、不正、不道徳といったものを忘れてしまった。皮肉にも、毛主席の「継続革命」という考えは新しい階級を撲滅し

なかつただけでなく、旧階級の境界を強化してしまった。以下でこの点を、ロロ族の例を通して検証してみる。

一 一九五〇年代前半までのロロ族とカースト制

ロロ族は一九九〇年現在で人口一八〇万、四川省南西部の涼山彝族自治州に居住している。ロロ族は彝族とも呼ばれる。より正確にいうと、ロロ族は彝族の一枝族

である。一九九〇年現在、彝族の人口は六五〇万で四川、雲南、貴州省と広西省壮族自治区に分散している。彝族の言語は、チベット・ビルマ語族に属する。

一九五〇年代前半までのロロ族は、奴隷制度ともいべき制度を保持していた。この社会では人民は「黒彝」(原語では「ヌオフォ」と呼ばれる)・「白彝」(同じく「チュフオ」という二階級に分けられていた。支配者(「シェポ」と被支配者(「チュイフォ」)である。

まずヌオフォという用語から説明する。彝語のロロ方言で「ヌオ」は「黒」を意味し、「フォ」は「群れ」の意である。中国語ではヌオフォは「黒彝」と訳される。これ以後、ヌオフォではなく「黒彝」と呼ぶこととする。ロロ族の原語では「黒」は「自己」「尊厳」「高貴さ」を象徴している。皮膚の色が黒いのは通常「真のロロ」であることの証の一つと考えられる。黒彝はまた「支配者、主人」の意で「シェポ」とも呼ばれる。

一九五〇年代後半、ロロ族の人口は約一一〇万であった。同時期の標本調査によると、黒彝は人口の約七%を占めていた。涼山自治区で百以上の黒彝の枝族が存在するが、黒彝はもとを辿ればグホウ、チュニエという二つの氏族から出た、と伝えている。思想として、黒彝が真のロロであり、最も勇敢で高貴だと信じてきた。さらに、

その血が最も純粋で骨は最も丈夫であるがゆえに、社会の支配者となる運命である、と考えてきた。

血の優越というこの思想は、ロロ社会ではほとんど自明の理として扱われてきた。ピエール・ブルデューは、ロロ社会の構成員全員が信じているがゆえにこれを「ドクサング」と呼んだ。社会的事実が暗黙のうちこのような思想の存在を認めていた。しかし一九五〇年代後半に共産主義政府が改革を行い、奴隷制度を撲滅した。伝統的には、黒彝が実際に社会の支配者であった。黒彝の人々だけが、どのような条件のもとでも誰にも隷属しない唯一の氏族であった。血の純粋性という神話は、黒彝内でのカースト内婚を厳密に実践することによって維持された。黒彝は白彝と結婚することを禁止されているだけでなく、恋愛も御法度であった。慣習法では、白彝と恋愛関係にあった黒彝は自殺を強要されるか恋人の白彝と心中させられるかの、いずれかを選択しなければならなかった。男の黒彝が女の白彝と恋に落ちれば公衆の面前で非難され、氏族から追放され、黒彝の地位を剥奪される。黒彝と白彝、または漢民族のような異民族と黒彝との混血であることがわかれば、その人は社会から差別され、決して黒彝とは見なされない。

ここまで、黒彝に対する存在としての白彝について具

表1 カースト別の人口構成 (%)

ヌオフオ	チュヌオ	アチア	ガシ
7	50	33	10

体的説明は行っていない。「チュフオ」は白い彝という意味である。口口語では「白」は「自己ではないもの」を象徴する。白彝には三種の階級が存在する。チュヌオ (qunuo)、アチア (ajia)、ガシ (gaxi) である。この三者は総称として「チュフオ」(qunuo) とよぶこともできる。「支配される者」という意である。しかし狭い意味では白彝はチュヌオである。これ以降は、広い意味で白彝と呼ぶことにする。複雑なので、図示してみる。

ヌオフオ (黒彝) || シェポ (支配者)

チュフオ (広義の白彝) || チュイフオ (被支配者)

1 チュヌオ (狭義の白彝)

2 アチア

3 ガシ

被支配者階層三者のうちでは、チュヌオが最も地位が高い。口口語では「チュヌオ」は「白い人」の意である。一九五〇年代後半の標本調査では、チュヌオは口口人口の五〇%を占めていた。大雑把に言えばチュヌオはヌオフオの従属者である。奴隷ではないのは、チュヌオは土地と奴隷を所有することができるといふ点においてである。奴隷とは下位カーストのアチアとガシを指している。チュヌ

オはまたアチア・ガシに比べて、経済的・政治的に独立している。しかしながら従属者としてチュヌオは黒彝に服従しなければならず、次のような義務を負う。黒彝から高利の借金をすること、黒彝に貢ぎ物をする事、毎年賦役を課されること、戦役にあたっての軍役、である。チュヌオは財産権も個人としての権利も完全ではない。土地を売るときには黒彝に手数料を払わねばならない。チュヌオが死んで遺産を相続するべき子孫がいなければ、遺産は黒彝に没収される。黒彝の許可なしには居所を移すことができない。チュヌオは生存権は保障されるが、黒彝によつて人身を売買される。

チュヌオは自身で口口民族であると考えているし、周囲もそう見なしている。チュヌオの間でも、純粋な血と硬い骨は大いに評価される。血の純粋さを保つためには、アチアやガシとの結婚を避けねばならない。硬い骨を持つとされるチュヌオの家系は古くまで遡ることができると信じられている。そして人口も、純粋でないと言われる人々より多く、アチア・ガシ・漢民族との混血も比較的少ない。一般的に、骨が硬いチュヌオの社会的地位は相対的に高い。黒彝の態度も比較的穏当である。

アチアとは、主人の差別のもとで結婚するが、住居が主人とは別である奴隷を指す。上述の標本調査では、ア

表2 アチアの出身別構成 (%)

口口起源	漢民族起源
64.43	35.57

アチアは、出身によって二種類に分類することができる。一方は口口に起源を持つと信じられる者であり、他方は漢民族起源である。一九五〇年代後半の標本調査では、その区分は上のようになつていた。

口口起源のアチアが、自分自身の自由を買い取つてチュヌオになることは比較的容易である。というのは、口口起源のアチアは元がチュヌオであり、チュヌオである親戚に援助を求められるからである。しかし漢民族起源

チアは口口人口の三三%を占めていた。奴隷として、次のような特徴がある。

①主人のための賦役。労働時間の三分の一から半分を占める。

②子どもの全てあるいは大半は主人の家内奴隷となる(ガシと呼ばれるが、以下で説明する)。

③主人によって、個人あるいは集団で売買される。

家内奴隷と異なるのは、アチアは主人によって割り当てられた土地を所有することができる、という点である。家事を巧みに切り盛りし、主人と巧妙に取り引きすること、アチアは家族の財産を蓄え土地を広げ、奴隷を売買することや自身の自由を買い取ることさえできる。

表3 ガシの出自 (%)

チュヌオから降格	アチアの子ども	漢民族	その他
2.56	21.44	44.96	31.04

のアチアが自身の自由を買い取つたとしても、チュヌオになることは不可能でないとしてもかなり難しい。その主な理由は、チュヌオは漢民族起源の人間と結婚しようとしなからである。結婚してできた子どもが、個人的自由のないアチアと結婚したとすると、自由を失つてしまふのである。アチアが、自由なアチアと結婚してチュヌオとなり、自身の氏族を形成して発展させアチア出自を隠すのは、困難で時間もかかる。比較的内容易なのは、チュヌオと結婚し、その氏族に加わるといふ方法である。しかしこれは、アチアが非常に豊かでチュヌオが貧しい、という場合に限られる。そういう意味では、漢民族起源を隠し、チュヌオ出自を装う、というのは、そのようなアチアにとっては生き残りの戦略である。

ここで、家内奴隷として言及したガシの説明をしよう。家内奴隷というのは「主人の台所で手足となる」といふほどの意味である。ガシは主人の家に住み、主人の直接の監督下で家事と農作業を行う未婚の家内奴隷である。上述の抽出調査では、ガシは口口人口の約一〇%を占めていた。その内訳を示す。

アチアとガシの間には、固定された境界というものは存在しない。ガシは、主人の差配によって結婚する限りにおいて、アチアになることができた。アチアを両親とする成人した子は、全てまたは大半が主人のもとでガシとならなければならない。

二 カースト制度廃止後のカースト思想復活

1 カースト制度の廃止

一九五六年から五八年にかけて中国共産党政府は、ロロ族カースト制度の廃止を実施した。これを「民主改革」と称している。

涼山ロロ地区への中国共産党勢力の進出と駐屯は一九五〇年に始まり、五五年に完了した。ある意味でこの過程は民主改革への準備であったと考えられる。進出・準備に五年かける、というのには長いと思われるかもしれないが、涼山ロロ地区が漢民族地域と文化的にも政治的にも隔離されていた、という事実を考えればそうはいえない。ロロ族と漢民族の間には多くの誤解と敵意が存在したので、共産勢力の進出は、共産主義による解放というよりは漢民族による侵略と考えられる傾向が見られた。

共産主義者たちは、昔の漢民族とは根本的に異なり、自分たちが友好的で信頼するに足る、ということをロロ人民に信用してもらうために努力を惜しまなかった。

共産主義者の進出・駐屯に続き、一九五五年冬に民主改革への動員が始まった。情報宣伝と動員の内容は次の三点である。

① 社会的発展という視点からすると、奴隷制度は暗黒で時代錯誤の制度であり、進んだ制度に取って代わられなければならない、という点を指摘すること。

② 奴隷制度は奴隷と労働大衆に深刻な苦痛をもたらすものとして糾弾し、階級意識と奴隷制度を撤廃する決意を喚起すること。

③ 民主改革という政策、段階、手段を広報し、奴隷所有者の不必要な心配を除き、奴隷と労働大衆に政策と戦いの注意喚起を行うこと。

民主改革が正式に始まったのは一九五六年である。ほとんどの革命と同様、涼山民主改革もまた暴力に溢れていた。暴動が多発した。統計が残っていないので暴動中の死者数は不明である。しかし四〇万人の奴隷が解放されたこと、八万ヘクタールの土地と二万頭の牛、七千軒の家屋、七千トンの穀物が奴隷所有者から没収されたことを勘案すれば、死者数は相当数に達したとみられる。

加えて一万以上の正規軍、五千の義勇兵、一一万の農民自衛軍が、奴隷所有者の暴動鎮圧に参加した。涼山地域で民主改革以前に流出していた三万丁の銃砲が没収された。

全ての革命と同様、改革は新しい人民に新しい制度がもたらされることを意味した。反動勢力は、財産のためだけではなく、ロロの伝統のためにも闘っているのだと信じていた。そういうわけで、反動勢力が全員奴隷所有者というわけでもなかった。反動勢力の言い分での社会的不平等、あるいはブルジョアの用語で「正統」というのは、祖先から世代を超えて伝えられたものである。それは当然のものと思なされてきた。反動勢力はロロの人民全員に、彼らが闘っているのは漢民族の侵略に対してである、と信じ込ませようとした。ロロ人民大衆の広範な支持を得るために、暴動の終結間際、彝族の奴隷所有者のなかには奴隷や自由民に「漢民族を涼山地域から追い出した後、自分たちの手で『民主改革』を行う」と約束する者まで現れた。

しかしながら奴隷や被支配層の大半が信用したのは、中国共産党から「輸入」された「異端」であった。漢民族の中国共産党は、今次の闘いは支配者に対する奴隷や被支配者自身や自由のためであり、黒彝の奴隷所有者と

政府の間の確執でもなく、ロロ族と漢民族との闘いでもない、と伝えたのであった。人民は中国共産党を偉大な解放者と思なし、決然と従った。それゆえに共産党は容易にロロ地区で反動勢力に対抗する巨大な農民自衛組織をつくり上げ、首尾よく社会主義に組み込むことができたのである。

漢民族はこの闘いにおいて計画者であり、勝者でもあった。しかし漢民族はこの闘いにおいて国家主義者ではなく、共産主義者であった。マルクス主義階級闘争路線のもとで、奴隷や被支配者の階級意識を首尾よく喚起することができたのである。漢民族自身にもそうしたように、巧妙にロロ社会を分断し、この闘いを民族的なものにしようという企図を潰滅させた。彼らは、中国の政治的統一のためだけでなく、ロロ民族の「人権」のためにも闘っていると信じていた。さらに、この闘いは正義と平等という世界のためでもある、と信じていた。また漢民族だけを解放するのではなく、ロロと世界を解放する、とも信じていた。このような信念と高邁な理想によって活力と正当性が生み出されていったのである。

2 生き残っているカースト思想の証左

いわゆる民主改革は一九五八年に終結した。制度上は、

社会的不平等は完全に消滅した。例えば、黒彝の支配者・貴族としての特権は廃止されている。以前の奴隷所有者の大半は「人民」という範疇に属し、他者を搾取するのではなく、自分自身の労働によって生計を立てている。チュヌオは、黒彝という支配層に対する隷属から解放され、自己責任による完全な経済的・個人的自由を獲得している。奴隷としてのアチアとガシは支配者から解放され、生産に必要な手段を得た。すなわち、自作農となったのである。

しかしながら思想面では、伝統的なカースト的境界が、制度としての支えを失ってから年月を経ても強固に生き残っている。生き残ったカースト思想の証左として最も衝撃的といえるのは、カースト内婚が未だに維持されていることである。黒彝は白彝との通婚を暗黙のうちに半ば無意識に、しかしながら首尾よく避けている。たとえカースト内婚という慣習的規則を破った者を罰する力を失ってしまったとしても、私が知る限り、農村地域での黒彝と白彝の通婚は一例もない。都市地域においても、そのような通婚事例を探すのは不可能ではないとしても困難である。また指摘するだけの価値がありそうなのは、黒彝と白彝の通婚よりもロロ族と漢民族の通婚例を探す方が容易である、という事実である。

一九五〇年代前半までは都市に居住するロロ族は実質的に皆無であった。当時、中央政府は多数のロロ族を公務員、職業人として採用しはじめていた。同じ都市または近隣に居住する黒彝が数的に限定され、また社会主義革命後は全国的に都市住民と農村住民の通婚に制約が設けられていたことを勘案すると、都市居住の黒彝がカースト内婚を維持するのは比較的困難である。しかし都市居住の黒彝が他の選択という誘惑に抵抗しているのは奇妙である。カースト内婚を維持しようという決意は、別の郡、県、果ては違う省にまで無意識のうちに結婚のネットワークを張り巡らせるほど強固である。さらに驚くべきは、このように血の純粋性を強調しようとする結婚が愛を強調する結婚より安定しているという実態である。

白彝のなかでは、チュヌオにおいてカースト内婚を維持しようという傾向が最も強い。民主改革の後、大半のチュヌオは黒彝よりも政治的に信頼のおける労働人民と位置づけられていた。黒彝はプロレタリアート独裁の敵だったのである。そのような立場を利用してチュヌオは、黒彝よりもカースト内婚という習慣をあからさまに維持しようとしたのである。チュヌオにおいてカースト内婚が存続したのはこのような理由と、他面では人口が多い

ということ、またブルデューが「沈黙と無意識のうち」と呼んだことにも起因する。チュヌオの氏族は非法的に、カースト内婚の規則を破った恋愛に干渉し、違反した者を厳しく処罰したり私刑を加えたりしている。例えば、文化大革命の間に次のような事例があった。兄弟四人が、ガシ出身者と結婚しようとした妹の恋路の邪魔をすることに失敗し、二人を縛って崖から突き落とした。その結果、妹は身体障害が残り、恋人は死亡し、四兄弟は懲役刑となった。このような事例は農民の間だけではなく、都市住民でも見られる。例えば一九八八年、美姑^{メイグ}県の県庁所在地で、ガシ出自の男性との恋愛を干渉されて、一人の女性が家族のもとから逃れて恋人の家に隠れたという事例があった。両親がその女性を発見し、彼女は強引に恋人の家から引きずり出されて実家に連れ戻されようとした。公衆の面前でのそのような屈辱に耐えられずに女性は帰途で服毒し、自殺を図った。当該女性を除き、この事例の関係者は全て一定地位を持つ者ばかりである。相手の男性がチュヌオ出自の女性と結婚しようとしたのはその時が二回目であった。

カースト内婚が存続している一方、カースト思想が復活しつつあるという兆候は、黒彝の支配者あるいは貴族という地位が、口口社会が過去三〇年以上にわたって大

きな変化を経てきたにもかかわらず完全に消滅していない、という点に示されている。その間、黒彝は当局によってプロレタリアート独裁の敵となり、政治的差別や迫害さえ受けてきたのである。一九五〇年代後半の「民主改革再検討・再構成」期、当局は極左急進的誤謬を訂正し、黒彝の地位を奴隷所有者から実態に見合う労働大衆に変更しようとした。これは一面では、共産党当局による温情と考えることもできる。もし奴隷所有者から労働大衆に地位が変更されれば、政治的差別や迫害を逃れることができる。しかし皮肉なことに、黒彝のなかには、地元当局に奴隷所有者としての地位を維持させるよう強く要請した者もあった。そういう行動の背景にあったのは、もし労働者と認められれば白彝と同じ地位に置かれてしまうという憂慮であった。他の（労働者ではない）黒彝からの差別に耐えられない、と考えたのである。言い換えれば、公式の分類にほとんど関心はなかったのである。真に関心があったのはカースト内での差別だった。

毛主席後の中国において、口口族の伝統的文化の復活と相俟って、黒彝の支配者・貴族としての地位が黒彝・白彝双方によって強調され潤色されてきた。例えば一九八〇年代後半、民主改革後にできた美姑県の村の住民が、その村にヌオフオがない、ということで大いに頭を悩

ませていた、という事実がある。そこで住民たちは集団で、とある黒彝の家族に請い、村民と共に村に定住するよう招いた。村民たちは、村内部の秩序を維持し、外部の妨害を防ぐために黒彝の一族が有益である、と信じ込んでいたのである。この目標を達成するのは容易ではなかった。この村における黒彝一家の生計を立てるために、各戸が、その所有する土地の一部を供出したのである。これは、「奴隷所有者としての地位復活となる」として、地元政府から村の指導者たちが咎められるところとなった。さらに、近隣の他の村で次のような事例が報告された。村の指導者が、亡くなった夫の霊を祖先のもとに送るための大規模なシャーマニズム儀式の援助として、妻に対し村民から寄付を募ったとして、地方政府が調査団を派遣した、というものである。前者の一件では、村の指導者は黒彝一家を招いたのではなく、自発的意志で移住したのだと強弁した。後者の件では、シャーマニズムのための金銭は村民から集めたものではなく、村長が貸したものだという議論となった。

黒彝が白彝の行為を正当化するために利用されたり操られたりするのは日常である。例えば「出別」という儀式を行うための折りである。これは遺族が死者を想像上の先祖の墓所に送るといふ、最大のシャーマニズム的

儀式である。この儀式の正統性を保証するために、少なくとも一人の黒彝がシャーマンのなかに含まれていなければならぬ、と彝族の人々は信じているのである。たとえこの黒彝が、儀式についての知識という点では何も貢献しない、としてでもある。仲介をする必要のある場合も、莊嚴さを加えるために少なくとも一人の黒彝を招く。たとえその黒彝が仲介に秀でていなくとも、である。

一九九二年、私は美姑郡で興味深い事例に遭遇した。この事例によって、彝族の伝統を象徴する存在として白彝が黒彝を利用して実態が示されるであろう。とある男性が女性と婚約し、数カ月後に結婚する運びとなった。しかし男性はこの婚約に不満を覚え、関係を解消しようとした。女性の家族はこの行いに激怒し、自分の氏族から荒くれ者十人以上を集め、男性の家に押しかけた。その家は一六キロ以上離れていたが、男性を説得しようとしたのである。家に到着したのは夜であった。ことの重大さに驚いて、男性の家族は慌てて村長と元黒彝の主人の息子を呼びに走り、仲介に入ってもらおうとした。仲介の席で男性の家族が説明したのは、男性の生年月日が女性に釣り合わない、という事情であった。女性の家族は「そのようなことは婚約の段階で両者がわかっており、正当な理由とならない」と反論した。次に尋ねたの

は、男性側がその女性は自分たちに合わない、と考えたのか、それとも男性の家族の骨が女性の家族よりも硬いと信じているのか、ということだった。男性側と女性側の主人であった黒彝同士は通婚していて、民主改革以前は男性側の家族の結婚を差配していたのであった。したがって男性側には、自分たちの血が女性側より高貴で、骨が硬い、と主張する筋はなかつたのである。このように反論されて男性側は、自分たちが間違っていたと悟った。自分たちが正しくなかつたことを悟ったがゆえ、またこの状況で婚約を破棄した場合に生ずる女性側の種々の「損害」を賠償せねばならない、という心配ゆえに、男性側が最終的に折れた。

黒彝と白彝の境界を強化し、利益を最大化するためには黒彝はこのような状況を利用する。ロコの伝統復活のなかで黒彝に再び払われるようになった敬意に酔いしれ、以前の屈辱を忘れて、血の高貴さを誇示するようになった黒彝もいる。ロコ族の都市住民の二世の間でさえ、黒彝の若者で、自分たちの尊厳を保つために白彝の女性と決して踊ったりしない、という者もあった。

このような現象に直面して、我々にはいくつかの疑問が生じる。なぜロコのカースト思想はこのように頑強なのか。本来の制度的支えを失ったにもかかわらず、どの

ようにしてこの思想が生き残っているのか。

三 カースト思想の復活

ここで議論するのは、ロコ族のカースト思想復活は伝統的観念が（旧時代の）残滓ざんしという基礎の上に立脚し、社会の新しい変化を利用することによって支えられた過程である、という点である。そのような過程を示すために、以下でまず旧来の思想、次に新しい現実、最後に旧来の思想が依存する残滓の基礎について論じる。

1 旧来の思想

ロコ民族、特に黒彝にとって、人間の体質、能力そして社会的地位は骨の硬さと血の純粹さによって決まるものである。無論そのような社会的不平等、あるいはバーマンの用語で「差のある固有価値」的判断は現代の常識からすれば笑止千万である。しかしタラル・アサドの議論によれば、観念が正当か不当かという問題ではなく、然るべき階層の人々によって然るべき状況で理解され受け入れられているか、という問題である。そのような観念は、ロコ社会では人民の社会的地位の差は基本的に先祖や出自によって決まるといふ観念と一致している。ブ

ルデューの用語ではそれは「ドクサ」として存在していたという。すなわち、客観的秩序と主観的原則の間に完全に近い一致が見られるとき、自然・社会的世界は自明のものとして出現する、というのである。社会の支配者としての黒彝は全て起源神話において兄弟氏族であるグホウまたはチュニエの子孫である。被支配者である白彝の始祖は、支配者である黒彝の始祖と同一ではあり得ない。白彝の間では、ガシとアチアの地位が最も低いのはその二つの階級が奴隷であるというだけではなく、直接漢民族から出た、あるいは少なくとも漢民族と混血している、と疑われるからだと言われている。チュヌオの地位がガシやアチアよりも上位であるのは、チュヌオが従属者であるだけではなく、純粋なロロと考えられ、ガシやアチアより血は純粋で骨は硬いと信じられているからでもある。ロロ社会では社会的地位は、経済的政治的な成功・不成功によって変えることはできない。チュヌオの奴隷所有者で非常に豊かな、権力も有する者もいるが、黒彝になることや名目的に真の支配者となることはできない。全財産を失ってしまった黒彝もいるが、誰も奴隷にすることはできない。そのような黒彝でも、白彝に対しては常に支配者なのである。事実、破産した黒彝で、黒彝であるというだけでチュヌオに威張り散らした

り搾取したりする者もいる。そうかと思えば、社会道徳に反して破産した黒彝の主人を援助し、財産を取り戻させる白彝もいる。黒彝の間では、地位は常に平等である。諺では次のように表現している。「黒彝の頭は卵のように、全て大きさは同じである」。時として黒彝は互いに残忍になることがあるが、社会の慣習によれば決して互いを奴隷にしたりはしない。

社会的差異は血の純粋さと結びついているということ信じれば、ロロ族、特に黒彝にとっては、財産や特権を維持するよりもカースト内婚を維持することによって血の純粋さを保つ方が重要であった。ある文献は、民主改革のための宣伝と動員において、地方政府で高位に就く黒彝も多数いたのに、他の黒彝に改革を受け入れるよう説得さえする者があつたと報告している。そこではこのように説かれた。「どうして民主改革を受け入れられないのか？ 改革は、我々に白彝と結婚するよう迫っているのではない。改革が終われば、ソ連がそうしているようにトラクターで畑を耕すことができるのだ、奴隷を使役しなくとも。黒彝はいつまでも黒彝で、白彝はいつまでも経つても白彝だ。だから改革について心配せずともよい」。

黒彝はカースト内婚と血の純粋さを維持しようと懸命

だった。白彝と結婚させられることを強制されたり説得されたりするいかなる試みにも反対するために、結婚の自由を保障する法律を制定しようとした。民主改革後の黒彝と白彝間の通婚や恋愛を避けるため、地方政府に勤めていたエリートの黒彝は、黒彝と白彝の通婚を禁止するよう政府を説得する文書を出していた。その根拠は「そのような禁止は社会主義を妨害するものではなく、ロロ族の習慣に寄与するものである」と謳っていた。

2 新しい現実

無論、政府は、白彝に黒彝との結婚を禁じるよう、黒彝に言い含められたわけではない。実際のところ政府は結果として、そのような黒彝エリートの集団的行動を見て「旧支配階級は廃止されたにもかかわらず、完全に消滅したのではない」との印象を受けたのであった。「旧搾取階級の構成員はいまだ健在であり、旧搾取体制を復活させようという願望もまだ潰えていない」と考えたのである。このような状況において、「決して階級闘争を忘れてはならない」という毛主席の有名な警告は生きているのである。

社会主義中国の歴史五〇年のうち少なくとも三〇年は、人民が深い恐怖と不安のうちに暮らしてきた。もし

も労働者階級と旧搾取階級の厳密な区別をしなかったとすれば、旧搾取階級が復権してまたも惨めな暮らしに陥るのではないかと恐れていたのである。それゆえに労働者たちは階級闘争への鋭い警戒を怠らず、旧搾取階級に対してのプロレタリアート独裁を維持しようと努めたのである。誰が反動分子であるか、人民の経済的地位の實質的变化を当局がどうして無視したのか、旧搾取階級を仮想敵としたのか、という疑問については西洋学者の優れた分析がある。私が指摘しておきたいのは、旧階級制度は共産主義中国にあっても三〇年以上にわたって重要な政治的アイデンティティであった、という点である。中国における階級制度はそれ自体がカースト制度に類似する点がある。それは、子どもの階級が親から相続されるものであり、政治的あるいは経済的資源さえも階級に応じて割り当てられている、という点においてである。そのような階級制度の政治においては、ロロ族の旧カーストは存在が曖昧になるというよりも先鋭化された。

バーマンが述べているように、カーストは自ら意識するものであり、集団を結びつける。一方、階級とは範疇でしかなく、「階級のための」というよりも「階級のうちにある」というように定義される。民主改革以前、ロロ社会に階級は存在しなかった。ロロが意識していたの

1 ヌオフオ (%)

奴隷所有者	労働者
88.47	11.53

2 チュヌオ (%)

奴隷所有者	労働者	半奴隷	奴隷
4.16	54.68	22.90	18.20

3 アチア (%)

奴隷所有者	労働者	半奴隷	奴隷
0.59	18.32	37.06	44.04

4 ガシ (%)

半奴隷	奴隷
3.4	96.56

白彝の奴隷所有者を黒彝の奴隷所有者と同等と見なしたりできなかつた、という点でも困難であった。黒彝は貧しくとも社会

はカーストであった。階級という分類は民主改革の間に、経済状況に応じて政府によってなされたのであった。この分類を計画した者の狙いが、生まれによって決まるカーストから経済によって分類される階級への転換であったとしても、その結果はカーストの区別とほぼ一致したのであった。一九五〇年代後半に行われた標本調査の結果によれば、カースト別の分布は次のようであった。

しかしながら当局が口口社会においてカーストを階級に編成し直すにあたって真に困難だったのは、カーストと階級がほぼ一致するという事実だけではなかった。「黒彝の労働者」を白彝の労働者階級と同列に扱ったり、白

的地位が高いという点で優遇されており、逆に豊かな白彝は貧しい黒彝に嫌がらせをされたり搾取されるという点を考慮に入れねばならないのである。言い換えれば、当局は幹部や一般大衆に向かって「階級はカーストだと考えるのではなく、全中国で実施されている階級政策が口口社会にも適用されなくてはならないのだ」と繰り返して警告を発する必要があったのである。

そのような政治的環境にあつては、口口社会は逆説に満ちていた。一方では黒彝に対する白彝の偏見は、労働人民が搾取階級に対して警戒心を高めていたことの反映と考えられた。したがってそのような偏見は奨励された。他方で白彝に対する黒彝の偏見は公の場で批判され、旧搾取階級が失った樂園を自らの手に取り戻す希望を捨てていない兆候であると考えられた。また一方では、政府に黒彝と白彝の通婚を禁止するよう求めた黒彝の手紙(上述)は、階級の敵が自らの古い権威と支配者としての地位を保全しようと努力した証と見なされた。他方で当局は公式文書において地方の幹部に、黒彝の奴隷所有者が白彝の奴隷と結婚することによって階級の境界が曖昧になるとして、警戒を怠らないように指示している。そしてまた階級の境界を明確に保つために、白彝の奴隷が黒彝の奴隷所有者と結婚しようとすれば諦めさせるよ

うに地元幹部に命令さえしている。これが意味するのは、彝族のカースト制度が旧体制の支えを失った後も偏見とカースト内婚は実質的に維持された、という点である。

階級闘争が強調されるようになって以降、特に民主改革の後はカースト間の敵意は増大し、緊張した。事実、民主改革においては黒彝と白彝の間に敵意が増大することを当局は期待したのである。民主改革に向けての宣伝と動員のなかで、人民解放軍の副司令官が将校に説明を加えた。それによると、「国が奴隷を解放しようとしているのは、所有者と闘争するのを援助することであって、奴隷自身が解放を買い取るのを援助するのではない」という。副司令官が指摘したのは「もし道徳的なベールが裂かれなければ、奴隷は所有者と妥協しようとするであろう。そうなると奴隷解放は決して安定せず、長続きしないだろう」ということだった。旧搾取階級が復権するのではないかと長期間恐れ極左主義者に煽動されたことでもあって、黒彝に対する白彝の敵意は文化大革命期に鬱積し強化され、遂に涼山ロロ地区での白彝による黒彝の集団殺害という事態に及んだ。そのような大虐殺は黒彝の蜂起を惹起し、当局が「涼山の新しい反動」と呼ぶに至った。人民解放軍が数年にわたって介入したが、不首尾に終わった。最終的には恩赦となった。黒彝が採った

もう一つの手段は、漢民族居住の大都会に逃げるといふものであった。当初、法律の保護に頼ろうとした。しかし当時は国全体が混乱しており、自衛するしかなかった。そこで革命の「紅衛兵」に志願し、都会での暴力的闘争に加わった。

したがって、社会主義革命が社会の不平等を撲滅しようという目的であったとしても、ロロ社会のカースト制度は長期間の社会主義革命下で維持・強化された、という結論に至る。カースト制度そのものについて民主改革後に変わったのは、上下関係が逆転したという点である。すなわち、旧支配カーストであった黒彝がプロレタリアート独裁の対象となり、旧被支配カーストであった白彝は社会の「主人」となった。白彝は黒彝を搾取階級から社会主義者に転換させる権利を有したのである。公式見解によれば、黒彝の奴隷所有者は、奴隷から搾取したという点、旧搾取制度を復活させようという反革命的思想を有している点で反道徳的で罪深い。それゆえに黒彝は監督のもとで改造されなければならない。それに反して白彝の労働一般大衆は、黒彝の奴隷所有者に搾取され抑圧されてきたがゆえに革命的で、信頼できる。

そのようなカースト階層秩序の逆転に直面して、黒彝の見解は公式見解と全く異なっていた。過去においては、

社会的不平等は生産様式の差というよりは血筋や骨の硬さによって決定される、と信じていた。自分たち自身についていえば、勇敢で知的であるがゆえにロロ社会の支配者となる運命にあったと信じていた。自分たちは他者が奴隷にできるが、逆は許されない。それは、自分たちが純粹な血と硬い骨を持って生まれてきたからである。今、民主改革で敗北し、プロレタリアート独裁の対象となっても、自分たちの骨は白彝よりも硬いと言ひ張るのである。硬い骨を持った漢民族の助けなしには、白彝が勝者となることはできなかった。民主改革の最中、黒彝の反乱勢力は政府に手紙を送って「鬭争から手を引き、黒彝と白彝を相互に闘わせて、どちらが支配者となるか静観してほしい」と要求した。黒彝は、白彝に負けたのではなく漢民族の共産主義者に負けたのである。

社会の新しい現実という課題に直面して黒彝は、自らの血の優秀性を示す社会的事実を探そうと努力を続けた。それは難しくはなかった。マックス・ウェーバーが「氏族のカリスマ」と呼んだもの——つまり優れた性質——に黒彝の優位さが基づいているという考えは、個人に限らず氏族全員に及ぶものであった。この場合、全ての黒彝がある技術に秀でている証明は必要ではない。黒彝の誰か一人がある特技を持っていれば、黒彝全体がその点

で秀でていると考えたのである。例えば現在のロロ社会で、チベット共産党の前総書記で人民大会の常務委員——共産体制の彝族の地位としては最高である——の呉京華は黒彝だ、ということを目にする。黒彝によるこれらの所謂「社会的事実」は二種類に分類できるであろう。第一に白彝に比べて黒彝の経済状況は良好で、犯罪率も低い。第二に、政府における黒彝幹部の地位と比率は白彝よりも高い。この点に関して統計資料は見あたらないので、単純な印象によるものである。それにもかかわらず、旧来のカースト思想は新しい社会的差異という基礎の上に存続し、有効になっているといえる。

全ての社会的差異が現実を反映しているとはいえず、自然な構造というよりは社会的な構造によるものである。黒彝の犯罪率が低いのは、長い間の政治的圧力によって用心深くなっているから、という説明も可能である。経済状況が良好、というのも二通りの説明が可能である。第一に、奴隷所有者であったにもかかわらず、動産は没収されていない。文化大革命中の都市での経験により、経歴と知識が豊富な者も見られる。逆説的ではあるが、民主改革以前に黒彝は国家幹部にとりたてられていた。共産党当局は、黒彝が反対すれば奴隷出自の者を幹部に採用しようとはしなかった。このことが、白彝出身者よ

りも幹部の比率と地位が高いという実態に寄与したのであろう。旧来のカースト思想が新しい実態に適応して永續性を持った、という点が重要である。新しい実態は、国家幹部と農民の関係がカースト制度に類似する部分がある、という点である。しかし旧来のカースト思想は、新しい社会的差異が社会的に構築されてきたという事実を頑強に無視している。旧来のカースト思想は社会的差異を馴化し、それ自体を正当化するように機能している。

3 残滓の基礎

旧来のカースト思想が中国社会主義階級政治のなかで生き残り、それに与する者がどのように新しい社会的差異を正当化してきたかについて述べてきた。旧来のカースト思想が依存する基盤は他に存在するであろうか。答えは諾、である。カーストは階級の極端な例である、というのみにとどまらない。マックス・ウェーバーにとって、地位が階級と異なるのは地位が共同体起源であるのに対して階級はそうでない、という点のみならず地位は純粹に経済的というよりも社会的な名譽によって決められる、という点においてもある。カーストは階級よりも一層複雑である。カーストは民族的または血縁的起源を持つと考えられ、地位のように慣習と法律によってだ

けでなく、儀式によっても保証される。ブルデューにとって、ある人間の社会における地位は「異なる領域、つまり作用している権力の分布を」当該人物が占めている位置によって決定される。「それは原則として（種類の異なる）経済資本、文化資本、社会関係資本、さらには象徴資本、通常地位とか名声、評判と呼ばれるものである。象徴資本とは種類の異なる資本が正当と認められる形態である」。ロロ社会においては、ある人物の社会的地位はその経済資本のみによって決定されるのではない。文化的にはロロは比較的均質である。儀式や文化資本に表立って異なる点はない。しかし氏族組織に起因する親族関係と資源については差異が非常に大きいので、ロロのカースト制度を過去に存続させたのは奴隷制度だけではなく、氏族政治であるとも断言できる。

民主改革以前は、涼山のロロ社会は指導者なき社会、とも呼べるような体制であった。黒彝の氏族単位を超えて、基本的政治単位として独立した常設組織は存在しなかった。氏族単位は一四〇ほど存在した。氏族内部では、政治的に固定された正式な上下関係はなかった。氏族長は世襲ではなかったので、個人の政治的才能、道徳性、地位から自然発生的に出現するものであった。白彝においては、チュヌオも独自の氏族を持っていた。チュ

ヌオの氏族は複数または単一の黒彝の氏族に支配されていた。しかしそれでもなおかつ氏族の利害に関与する政治的单位として有効だったのである。アチアとガシの大半は独自の氏族を持たなかった。主人の所有物として、アチアやガシは主人の氏族に加えられたのである。これが意味するのは、氏族、血筋、政治的単位とカーストの所属はロロ社会においては基本的に一致する、ということである。この状況はマイヤー・フォーテスが述べたところと著しく似ている。「この種の社会において氏族は法律的な意味での単位であるばかりではなく、第一次的政治結社でもある。かくして個人は、氏族の一員であることを除いて個人的に法律的・政治的地位は持たない。言い換えれば、社会において全ての法律的関係は氏族制度という文脈においてのみ生じるのである」。ロロ社会において、氏族を持たないということは政治的役割を持たないという意味であり、他人の氏族に属さなければならぬ、という意味でもある。そのような人びとのカーストが最も低い。巨大で強力な氏族は強力な政治力、果ては経済的保護まで意味し、そのような氏族の一員を誰も不当に扱ったり、まして奴隷にしようとは考えない。これこそが黒彝が決して奴隷とされない原因であり、強力な氏族を持つチュヌオもまた奴隷になることは

稀である。

表面上は、カーストの所属は氏族横断的である。しかし表面下では、カーストの所属は氏族の所属の延長線上にある。黒彝の内部ではさらに、氏族に基づく血の優劣性の所属まで見られる。白彝内部では、漢民族起源の白彝とロロ起源の白彝という下位分類がある。血の純粋さと骨の硬さについて語る場合、特定の氏族を想定している。硬い骨を持った氏族というのは通常、カースト内婚制に基づく名声だけではなく、長い歴史とロロ社会での構成員の多さを指している。

参考文献

- Asad, Talal, 1979, "Anthropology and the analysis of ideology". In *man*. Vol. 14.
- Berremán, Gerald D., 1981, "Social inequality: a cross-cultural analysis". In Gerald D. Berremán (ed.), *Social Inequality: Comparative and Developmental Approaches*. New York: Academic Press.
- Billetter, Jean-Francois, 1985, "The system of 'class status.'". In Schram, S. R. (ed.), *The Scope of State Power in China*. Hongkong: Chinese University Press.
- Bourdieu, Pierre, 1977, *Outline of a Theory of Practice*.

Cambridge: Cambridge University Press.

——, 1985, "The social space and the genesis of groups". In *Theory and Society*, Vol. 14.

程賢敏、陳音凡、一九九三、『四川、雲南における彝族人口の比較研究』一九九〇、北京において開催の国勢調査に基づく少数民族人口シンポジウムでの未刊行論文。

Fortes, Meyer, 1953, "The structure of unilineal descent groups". In *Man*, No. 55

胡慶鈞、一九八五、『涼山彝族奴隸制社会形態』、北京、中国社会科学出版社。

Kipnis, Andrew B., 1995, "Within and against peasantness: backwardness and filiality in rural China". In *Comparative Study of Society and History*, No. 37.

Kuhn, Philip A., 1984, "Chinese views of social classification". In James L. Watson (ed.), *Class and Social Stratification in Post-revolution China*. Cambridge: Cambridge University Press.

ルオホン、一九五六、一九八一、「中央慰問集団への数通の手紙」、韋清風、他(編)『涼山彝族奴隸社会の变革：資料集』、北京、中国社会科学院民族研究所。

Lin, Yaohua (林耀華), 1961, *The Lolo of Liang Shan*. New Haven, Connecticut: Human Relations Area Files, Inc.

林耀華、一九九五、『涼山彝族の大変化』、北京、商務印書館。

涼山彝族奴隸社会編写集団、一九八二、『涼山彝族奴隸社会』、北京、人民出版社。

涼山彝族自治州概況編写集団、一九八五、『涼山彝族自治州概況』、成都、四川民族出版社。

涼山州婚姻弁公室、「一九六五」一九八一、『彝族結婚問題に関する若干の具体的政策の一件：草稿』、韋、他(編)、前掲書。

馬寅(編)、一九八九、『中国の少数民族誌』、北京、外語出版社。

潘蛟、一九八八、個人的現地調査。

——、一九九〇a、「涼山彝族等級制度の起源を論ず」、『中央民族学院学报』第五号。

——、一九九〇b、「等級制度起源約論」、『民族学研究』第九卷。

——、一九九二、個人的現地調査。

——、一九九四、「婚姻改革中に遭遇した問題より涼山彝族婚姻制度の残存を論ず」、『民族学と現代化』北京、中央民族大学出版社。

Potter, Jack M., 1993, "Socialism and the Chinese Peasant". In C. M. Hann (ed.), *Socialism: Ideals, Ideologies, and Local Practice*. London and New York: Routledge.

Potter, Sulamith H., 1983, "The Position of Peasants in Modern China's Social Order". In *Modern China*, Vol. 9, No. 4.

- Potter, Sulamith H. and Potter, Jack M., 1990, *China's Peasants: The Anthropology of a Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 四川省編輯処、一九八五、『四川省涼山彝族社会歴史調査：総合報告』、成都、四川省社会科学学院出版社。
- 粟裕、「一九五七」一九八一、「涼山軍分区の准尉以上の軍官及び州以上及び機関以上の幹部会議における講話」、章、他（編）、前掲書。
- Weber, Max, 1967a, "The development of caste". In Bendix, Reinhard and Seymour Martin Lipset (eds.), *Class, Status, and Power: Social Stratification in Comparative Perspective*. London: Routledge and Kegan Paul Ltd.
- , 1967b, "Class, status and party". *ibid.*
- Whyte, Martin King, 1975, "Inequality and stratification in China". In *China Quarterly*, No. 64.
- , 1981, "Destratification and restratification in China". In Gerald D. Berreman (ed.), *Social Inequality: Comparative and Developmental Approaches*. New York: Academic Press.
- 張榮、「一九五六」一九八一、「張榮同志の中央統一戦線部招集による座談会での講話記録」章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党涼山地区委員会、「一九五六」一九八一、「民主改革広報後の農村動態」、章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党涼山州委員会、「一九五八」一九八一、「民主改革運動に関する初期総括」、章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党涼山州委員会弁公室、「一九五七」一九八一、「涼山彝族各階層人士座談会における上層階級の思想状況及び労働人民が会議中に果たした役割についての簡報」、章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党馬辺県平叛改革弁公室、「一九五六」一九八一、「十一月より一月に至る反乱平定の報告」、章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党普雄工作委員会、「一九五六」一九八一、「工作状況報告」、章、他（編）、前掲書。
- 中国共産党昭覚県委員会弁公室、「一九五七」一九八一、「毛主席の指示による、改革遺留問題処理状況の昭覚県概況」、章、他（編）、前掲書。
- 中央慰問団第二分団、「一九五七」一九八一、「慰問工作総括報告」、章、他（編）、前掲書。
- (Pan Jiao "The Maintenance of the Lolo Caste Idea in Socialist China", *Inner Asia*, Vol. 2, No. 1, 1997)
- (翻訳：角岡賢一)